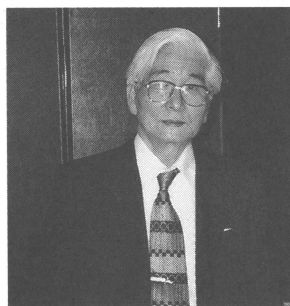


## 片山 昭氏を悼んで

去る2月11日に片山昭さんが肺炎のため逝去された。72歳であった。つい3か月前に勲3等瑞宝章を受章された記念祝賀会を開いたばかりで、その時のお元気だった様子と訃報の知らせとが私の心の中でなかなか馴染まなかった。

片山さんは1950年3月に東京大学理学部天文学科を卒業され、神戸海洋気象台に採用され、海洋課測器係となった。当時神戸海洋気象台には立派な望遠鏡があり、その保守・管理と活用を担当した。望遠鏡でシンチレーションの観測をし、それから大気の流れのスペクトルを推測するという研究が気象庁に入って最初の研究と聞いている。その後東京管区気象台を経て気象研究所勤務となった。その間大気大循環を駆動する熱源に関する研究に取り組み、1962年には気象研究ノートの第13巻第2号に「地球の熱収支」をまとめられた。その後の研究成果は気象集誌に「北半球対流圏の放射収支について(I), (II), (III) (1966, 1967)」としてまとめられた。これらの著作は、片山氏と同じ年に気象庁に採用となり、現在UCLA名誉教授である荒川昭夫氏の「最近の大気大循環論」と並んで、大気大循環を学ぶもののテキストとして広く読まれた。

大気大循環の熱源の研究を契機としてUCLAの大気大循環モデル開発に参画することとなり、UCLAの2層の対流圏モデル用の効率的な放射モデルを開発した。これは片山スキームとしてその後いろいろなモデルで用いられた。更に陸面及び大気境界層のモデル化にも関わった。この大気大循環モデルの力学部分は荒川ヤコビアンを拡張したスキームで、現実的な海陸分布を与えて求められた1月と7月の月平均再現結果は1971年に技術報告書として発表されたが、月平均海面気圧分布図は驚くほど現実的なものであった。その後鉛直解像度を上げたモデルでこれ以上の再現に成功するには約10年を要した。1978年には日本気象学会より



大気大循環の熱収支に関係する一連の研究に対して藤原賞を授与されている。

片山氏は気象庁内でその後長期予報課長、台風研究部長、予報研究部長、神戸海洋気象台長、気象大学校長などを歴任された。季節予報業務に関しては予報研究部在職当時より統計的手法に代わって力学的な手法を導入すべきであることを一貫して主張してこられた。藤原賞を受賞されたときの記念講演のタイトルも「数値長期予報を夢みて(天気, 1978年11月号)」であった。しかしその当時はまだ大気大循環モデルの性能からいってとても力学的な手法を導入できる状態ではなかったが、その後のモデルの進展と計算機事情の改善により、気象庁では1か月予報に関しては1996年3月より大気大循環モデルを用いたアンサンブル手法により、力学的予報を開始し、導入以前と比べて予報の成績が飛躍的に向上した。現在は更に3か月予報や暖候期予報、寒候期予報にも気候モデルを用いた力学的手法の導入を目指して開発に取り組んでいるところである。片山氏の悲願であった季節予報への力学的手法の完全なる導入を誓って、ここに片山氏のご冥福をお祈りする。

時岡達志 (気象庁)